
ジルコンの勇者

蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジルコンの勇者

【Nコード】

N4259V

【作者名】

蜻蛉

【あらすじ】

気が付いたら勇者として異世界に召喚されました。その割りには体力も全然上がってないし、特殊能力も無し。こんなんで本当に生き残れるの…？ なんかきな臭い、と部屋をこっそり抜け出したところ、衝撃の事実を聞いて…。

*注意：9月12日に1話目から書き直して、第3話を追加しました。

第1話 お年寄りは大事に

ジルコン：ダイヤモンドの代用石の一つ。古くは貧者のダイヤモンドとして広く流通していたが、現在ダイヤの類似石としてのその価値はないに等しい。

＊＊

「 × ！」

「 × × × ？」

頭がガンガンと痛む。

いったい何があったんだ？

重い目蓋をこじ開けると、私の目の前にはまるでゲームに出てくる魔法使いみたいな格好をしたお爺さんと、いやに豪華な服を着たおっさんが立っていた。

あたりを見回す。

薄暗い地下室のような部屋だ。

部屋の広さの割に天井は低く、外部との接触を締め切るかのように、窓すら見つからない。

足元には円状の変な紋様が、私を中心にびっしりと描かれていた。気の遠くなりそうなほど緻密なそれは、薄暗い室内の中で淡く発光しているように見える。

中心人物らしい変な格好をした二人の周囲に視線を走らせると、鎧

をかぶった兵士のような人たちが微動だにせずに立ちふさがっていた。物騒な。

…あれ？

彼らを眺めているとおかしなことに気が付いた。

彼らはぐるりと、私を取り囲んでいるのだ。

おかしい。

誰がどう見てもおかしい。

私が混乱している中、真正面に立たずんでいたお爺さんがゆっくりと私に近づいてきた。

嫌な雰囲気だ。

何が、とはつきりは言えないが嫌な感じがした。

ずるずると後退る私を見て、お爺さんは近くにいた兵士のような人たちに一言一言告げる。

すると彼らは私を無駄のない動きで拘束した。

逃げようとする私を兵士に押さえ付けにさせると、にこやかな笑みを浮かべたお爺さんは私の額に指を押しつけた。

「っ…！」

あつい。

まるで額が燃え上がったみたいだ。

そして痛みは次の瞬間には嘘のように消え去った。

「言葉の意味はわかりますな？」

不思議なことに、ほんの数秒前まで発音の仕方さえ分からなかった

た言葉が理解できるようになっている。

私の額に押しあてていた指を外すと、お爺さんは安心させるようにほほ笑みを浮かべた。目じりのシワが穏やかに深まる。優しいような顔だ。

…さっきのは気のせいだった？

「疑問で一杯でしょうが、先に我らの質問に答えていただきたい。勿論、あとで貴方の質問にもちゃんとお答えしましょう。よろしいですか」

お爺さんの、どこか反論を許さない口調に押され頷く。お爺さんは一歩下がると、私の全身を舐めるように見つめた。気まずい。痛いくらいの視線が突き刺さる。

ふと気が付くと、この場にいる全員が私に注目しているようだった。

「貴方は男ですな？」

私は女だ。

生まれてから一度も女以外のものになった覚えもない。

たえ声がやや低かろうと、少々骨太だろうと、それはかわらない事実である。

本来ならすぐにも答えだし、あんまりなその質問に怒りくるったかもしれない。それを躊躇したのは、深いシワに埋もれた瞳が、爬虫類じみた光を帯びた気がしたからだった。

「……男だとなにかまずいんですか？」

「いいえ、男なら結構」

お爺さんは今度こそ嬉しそうに目を細め、豪華な服を着たおっさんに目配せする。
するとおっさんも、力強く頷いた。

「ようこそ勇者様。我ら一同、心より貴方を歓迎しましょう」

第2話 据え損なんてあつてたまるか

なんかおかしい。

勇者として城に迎え入れられ早三日。

私は多大な違和感に苛まれていた。

実をいうと、勇者つてことは黄色い悲鳴が上がるようなアイドル扱いなのかななんて、ちよつと期待していたのだ。

けれど突き刺さる視線は期待や熱狂以前に不審者を見るようなものばかり。それどころかお城の人々とは挨拶することすらまず無い。係わりたくないと思われているみたいで、意図的に作った距離感を感じるのだ。

あれは遠慮とか、ましてや畏怖なんかじゃない。ポジティブに考えて侍女の女の子に話し掛けたところ、横にいたおばちゃん侍女に屑をみるような目で睨みつけられる結果に終わった。

間違いない。あの目は『このロリコン野郎がツ……！』といていた。絶対に何かが間違っている。

ハーレムどころか話すのすらお爺さんもと狸ジジイとオッサンぐらい。

なにが悲しくてそんな生活を送らなきゃならないのか。

こつそり部屋を抜け出そうとすると、どこから現れたジジイに阻止されるし。

あの人は私のストーカーですか。いいえ、あれは狸です。訳文風に言ってみました駄目でした。

今日も部屋から抜け出して数歩、ゾクリと背筋に走った寒気に私は体を震わせた。

……見張られている、絶対に見張られている。

「おや勇者様、どちらに向かわれるので？」

当然のように斜め後ろからかけられた声に、引きつった笑顔を浮かべる。

このジジイ、暇なのか。

「……あ、あははー。いや、ちょっと城内見学を。やっぱお城って美人さんが多いですねー！」

うなれ私の表情筋……！

動揺丸出しの私にジジイは胡散臭い笑みを浮かべた。

「ほう、これは恐縮ですな。勇者様は手配させた者にもお手をつけられないので、てつきり好みに合わないのかと」

そうなのだ。

このジジイ、私に夜のお相手を手配、なんて余計な真似をしてくれやがったのだ。

さすがに初日にいきなり寝室に夜這いに来られた時は本気で肝が冷えた。

だって部屋に入ったらベットのの中にムッチリ巨乳のお姉さんがスタンバイしてたんだもの。

なんとか誤魔化して、たぶんお姉さんを手配したであろうジジイを呼び出し、そんなのは必要ないと説き伏せ追い返したものの、ジジイは「ほう、わかりましたぞ」とニヤニヤ含み笑い。

ホントに大丈夫かこいつ？と思いつつ迎えた翌日の晩。

ベットの中には小鹿のように震えるロリペタ少女が入っていました。

全然わかってないっ……！

私が頭を抱えて崩れ落ちたのは言うまでもない。

さらにその翌日なんてシヨタ少年がベットに潜り込んでいた。

ジジイはこういう目で私を見ているのだろうか。知りたいけど知りたくない、むしろ全て無かったことにしたい。

日に日にお城の皆さんの視線が冷たくなっているのは、きっと気のせいじゃないだろう。

だめだこいつら…早くなんとかしないと…、なんてリアルに口走ったのは初めてだった。

そんなこんなで、大事なものを失いながらも『女とばれる』『死亡フラグ』は何とか回避しているが、そのうち彼女たちは風呂にまで押し掛けてきそうな気がする。

こうなれば女とばれるのも時間の問題だった。

「ハハイやそんなまさか、……じつは、自分の国では一度でも婚前交渉をすると『ウホッ！野郎だらけの筋肉天国』（ポロリもあるよ！）に落ちる呪いがかかるという言い伝えが……」

あつたりなかったり。

「なんと！それは随分と恐ろしい国ですな……」

「ええそうなんです、恐ろしいんです。しかも一番怖いところは、本人だけじゃなく係わった人間にもこの呪いがかかるのです」

「なんですと、まさか…！」

無言で見つめると、ジジイはゴクリと生唾を飲み込み後ずさった。

心なしかケツをおさえている、… ような気がする。
蒼白な顔して悲壮な表情になったジジイに頷きをかえした。

「あなたの想像通りです」

ごめん嘘です。

…… いろんな意味でセーフだと信じたい。

ガクリと頂垂れたジジイの肩に手を置き、出来る限りの力で気遣うように優しい声を出す。

今なら私、役者になれる気がするの。

「あなたを巻き込みたくない、わかっていただけですな？」

「うぬ……。いたしかたない」

緩みそうになる口元を押さえ、真面目な表情で私はジジイに手を差し出した。

グツと強い力でお互いの手を握り合う。

すばらしい達成感だ。

「…… 自分もそろそろ部屋に戻ります。あ、後で部屋にポリムの実を丸ごと一個、届けてもらえませんか？」

ポリムの実は味と形が林檎にそっくりな実で、皮は紫色をしている。かじるとシャリシャリではなくゴリゴリと音がするのだけれど、食感 は 林檎と同じという摩訶不思議な実だ。

初めて食卓に並んだ時は、その毒々しい色にびっくりした。

「ポリムの実？ 昼食に出しましょうか？」

「いえ、ちょっと小腹が痛いちゃって。それにあんなに人がいたら丸ごと食べるわけにもいかないでしょう?。」

「まあいいでしょう。丸ごとですな」

「ええ、お願いします」

頷くと、私はおとなしくもと来た部屋へ歩を進めた。

諦めたわけじゃない。計画を練るのだ。

この軟禁状態と、この三日間ジジイとしか喋ってないという恐怖の自体から脱出しなければならぬ。

すべては汚名返上のために…！

第2話 据え損なんてあつてたまるか（後書き）

2話をちよつと書き直してみました！
書くのが遅くてすいません。

第3話 夢

夢を見た。

いや、もつと正確に言うなら私は夢を見ている。

そこはたぶん夜で、室内をオレンジ色の小さな蠟燭の灯りが照らしていた。

人がいた。

豪華な部屋の真ん中で、ベットに座り込む黒髪の男が手に持った剣を眺めている。

白銀に輝く刃は男の漆黒の瞳を映し出す。

男のまるで旅にでも出るような質素な恰好は、贅をつくした部屋の中で一つだけ異物のように馴染まない。

どれくらい経ったろう、目を伏せると彼は鞘に剣を仕舞い、灯りを手元に手繰り寄せる。

蠟燭に息を吹きかけると、それはほんのわずかに勢いを増したあと煙をくゆらせ消えた。

立ち上がった彼の髪が、小さく揺れ闇に溶け込んだ。

男は堂々とした足取りで、部屋の隅の鏡の前に立つ。

それは古めかしい宝石のはめ込まれた鏡。不思議なことにその鏡には何も映っていない。

男は鏡の中に三つ、四つほど何かを放り込む。

私は あ、と反射的に目を瞑ったが、予想していた硬い物同士がぶつかる音はなく。

そこには何も映さない鏡だけが変わらず佇んでいる。

最後に皮の手帳をふところから取り出し、男は窓辺へ歩みだす。背にわずかばかりの荷を背負って。

彼は出窓の脇に手帳を置き……そして力強く窓を開いた。

男の歩みを留めるように風は室内へ勢いよく吹き込む。

しかし部屋に背を向ける男の背に迷いはない。

星さえごく僅かな、新月の空がカーテンの隙間から覗いていた。

吹き荒れる風が、窓辺に置かれた手帳にぶつかり、容赦なく手帳のページをめくる。

穏やかな風景の広がる前方を男は睨み付けた。まるでその奥に何かがあるように。

最後に手帳を持ち上げると、彼は鏡へそれを投げ込む。

皮の表紙に金字の書かれたそれは、音も立てずに鏡の中に消えていく。

次に思わず目を瞑るような強い風が吹いたとき、そこにはもう誰もいなかった。

第4話 ジェニファーちゃんは友達です

ジジイが言うには、私は勇者として国を救うために召喚された、らしい。

とはいっても、夜中こっそり確かめてみたところ特殊能力は目覚めたりしてないし、力も変わってない。

与えられた部屋の中の無駄に古めかしく豪華な鏡を覗いてみても、変わらず平々凡々な私が映っているだけだ。

少し茶けた肩にかかるぐらいの黒髪、それより少し暗い色の瞳。ひよろりと伸びた背に、体つきは良く言えばスレンダーで、悪く言う

と肉付きの悪い貧相なもの。

女だとはれなかったのも、私はこちらの人には十五ぐらいの少年に見えるらしい。その事実気づいたときは思わず遠い目をしてしまった。

もちろんプロは違うのだろうが、変装の素人の男が女に化けようとすればどう頑張っても違和感がでる。

けれども、女が少年に化けようとするのはそれほど難しくない。特に私は顔にすら女らしい曲線が少ないのと骨が太いのでなおさらだったろう。

しかし疑われなかった一番大きな理由は、こちらの人は男も女もみんな髪を伸ばしているからだ。

ジジイがこぼした情報によれば、これぐらいの短い髪は下級階級の少年ぐらいしか居ないらしい。

助かったと安心すればいいのか、ひどい侮辱だと枕を涙に濡らせばいいのか、……すごく微妙である。

……話を戻そう、そう勇者についてだ。

ともかく私に新たな能力はついていない。

ために腹筋をしても15回目で軽く息が切れ、腕立てなんて20回でダウンした。そして翌日の筋肉痛。小学生の方がまだ元気だろ
う。

ジジイがホントのことを言ってるかどうか、とっても怪しいところ
だ。

もしかしたら特殊能力が命の危機とかで目覚めたりするのかもしれないが、そんな危ない賭けはしたくない。

ジジイも『具体的にどこから救えばいいのか?』や『いつ帰れるのか?』という質問をはぐらかすばかり。それがますます疑いに拍車を
かけた。あのヒゲ絶対何か隠してる。

しかし情報収集しようにも、こんな制限のある生活じゃ碌に城の
中も探索できないのが現実だ。

どうしようかと頭を悩ませる私に、チャンスは意外とすぐ訪れた。

「へっ?他国に会談に行くんですか?!」

「おや、うれしそうだな」

「いやいや悲しいです、とっても。さびしくて泣いちゃいそうっ」

「…ほお」

「お土産たのしみにしてますね」

「そうですね、『お爺ちゃん気をつけて行ってきてね(はーと)』
と言えたなら考えますぞ」

「『おじいちゃんそれだから結婚できないんだよ(はーと)』。食
べ物がいいです」

「ほっほほ、こいつ」

「きゃあ、おじいさんったらこ・わ・いー」

ちなみに最後のは裏声です。それにしてもこの爺、ノリノリである。
孫と祖父のように和やかな会話をくりひろげ、軽く攻撃魔法を放つ

ジジイから私は全力で逃走した。

……それにしても、他国へ行くことをわざわざ私に教えたのは牽制だろうか。

どちらにせよ守るつもりは欠片もないが、表面だけは良い子にしておこう。

迎えた当日、ワクワクしながら探索の最終準備をする。

奴は魔法がつかえるようなので、私の部屋を覗かれてる場合を考え、ジェニファーちゃん（服とシートで作った等身大人形もどき）を部屋のベットに寝かせておいた。

もしかしたら私自身をジジイが見張ってる可能性もあるし、ジジイが会談をしている時間を使って情報収集にあたる。

ちなみにその情報はいいい人そうなた女さんの前で「自分、よく考えたらお爺さんしか喋ってくれる人いないんですよ。今ごろあの人なにをしてるんだろう……」と、項垂れるとあっさり教えてもらえた。一緒に糖蜜パイもくれたので一人で食べた。おいしかった。なにか大切なものを失った気がした。二度とこの手は使いたくない。私自身へのダメージがでかすぎる。

最悪、部屋から出たらばれる、とかいう魔法だった場合は諦めよう。部屋のトイレが詰まったとか言えばなんとかなるはず。…女としてはどうかと思うが。

残り短い時間を有効に使うべく、私は部屋の外へと足を踏みだした。

「で、今度の勇者さまはどうなんだよ？」

お城の中をスパイ映画しながらコソコソ歩いてた時、ふと耳をかすめた言葉に私は硬直した。

『勇者』って私だよね？

どこか引つ掛かる違和感を抱えたまま、そおつと扉に近づく。

扉の僅かな隙間から中を覗くと、チビとゴツイ短髪の二人組の男がカードゲームに興じていた。

「ハッ！駄目だねありゃあ。聞けば少女に夜枷をさせてるようじゃないか。とんだ変態やろうだ！」

違うわボケ。誰が変態野郎だ。

男たちの間に割り込みたくなる衝動をぐつと押さえる。

なんつー言い掛かりだ。

少女達の手配もあのクソジジイが勝手にしたし、そもそも私には大事な部分が無い。もちろん突っ込めるわけもない。

だいたい夜枷とかって、そういうことを考え付く奴が一番変態だとおもっの。つまりジジイな。

あいつの無駄にフサフサな髪の毛バーコード型にハゲればいいのに。私がジジイの毛根を呪う間にも、男たちは勝手なことをいいつつ盛り上がっている。

「へえ、ガキみたいな顔をしてやるじゃないか今度のは」

「ハッ！とんだエロガキさ」

短髪がチビの手持ち札からカードを抜き取る。

抜き取ったカードを見てに眉を寄せる短髪を眺めながら、私はアレ？とまた違和感に引つ掛かりを覚えた。

あいつ今なんて言った？

……『ガキ』じゃない、早すぎる。『エロガキ』でもない、ここはここでイラッときたがもう少し後。

『今度のは』、そうだここだ。

『今度の』？

つまり以前にも私以外の勇者がいたってことか？ いや、もしかしたら今もいるのかもしれない。

ゾクリとした痺れが全身を襲う。もちろん寒気的な意味で。

……その人たちはどうなったんだろう。

「にしても初代様がなくなってから苦労するぜ」

「まったくだ。どこにいったのやら」

「…そういやさ、噂で聞いたんだがとんでもない事になってるらしい」

「へえ、なんだよ気になるな」

「聞いて驚くなよ、……じつは今、あの方は反乱軍に行るんだと」

「反乱軍？！？！どういう事だ！」

「お、おい！声がでけえ」

手からカードを落とし大声を上げた短髪を、チビの男が慌てて制する。

「…わりい。それからどうなったんだ？」

「どうもこうも、風の噂だよ。ただこの噂アタリだと思うぜ」

「……それがほんとなら、ずいぶん大層なことになってるな」

「ああ、王がここんところ必死で勇者を召還してたのは、たぶんその所為だろ」

「それじゃあ今回の勇者様が初代様にそこそ似ていて助かったなあ」

「とはいっても色と性別だけじゃねえか」

「それだけ合つてれば上等さ」

短髪が肩をすくめた。チビがとったカードを見てうげっと嫌そうな顔をした。

「まあこの前のは大変だったしな」

「なにせ出てきたのが髪色も違う女だろ？」

「王様はご乱心」

「ありゃあかわいそうだったな」

「ハハ、今回は男でほんとよかったよ」

「手癖はちいと悪いが」

ハハハと談笑する男たちを見て私の背筋に冷たい汗が流れる。

何か知らんがやばいのは分かる。悠長なことなんて言ってる場合じゃない。いますぐにでもこの城から逃げ出さなくては。

第4話 ジェニファーちゃんは友達です（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

更新遅くなってすいません。

やっとスランプ脱出しました。

第5話 ヒーローについての考察

「しつつかし、なあ……」

ジジイは明日にでも帰ってくるだろう。

そうしたら逃げるチャンスはいったん潰れる。またアイツがどこかに行くのを待とうか？それこそ、いつ機会がくるかもわからないけれど。……いや、まず第一に私は逃げれたとして、どこへ行くつもりなのだろう？帰る場所もないのに。

衣食住も得られるし、訳のわからない世界に放り出される事を考えれば、胡散臭い場所でもここに居るほうがまだ安全だ。

「……………」

帰りたい、なあ。

小さくため息をつき、私は力なく部屋に足を進めた。

『元の世界に戻りたい。』

城ここに住むことを躊躇している理由がそれだった。

……たぶんジジイは、私を帰す気が無い。今までの態度から推測するに、少なくともしばらくは。

重い足取りで部屋の扉を開け、ベッドの上に身を投げだす。倒れこむ身体の重みに、マットレスは深く沈みこむ。

柔らかすぎるベッドの上で寝転がり目を瞑ると、精神的な疲れが一気に押し寄せてきた気がする。

枕に顔を埋めると、ふと城中で二人の男が話していた会話が頭によ

ぎった。

『それじゃあ今回の勇者様が初代様にそこそ似ていて助かったなあ』

『とはいっても色と性別だけじゃねえか』

『それだけ合つてれば上等さ』

「……今回の勇者、ねえ？」

バカみたいだ。

ほんとに馬鹿馬鹿しい。私のどこが『勇者様』だ、ただの替え玉じゃないか。浮かれ上がった頃の自分を殴りに行きたい。

勇者だからと黄色い声が上がらなかったのも当たり前だった。きっと彼女達は、本物の最初の勇者を知っていたのだ。

チビと短髪の男は私が同じ髪色だと言っていた。

……それはつまり、そういう事なのだろう。

全部勝手な憶測だけでも、じゃなきゃ力も持たない勇者をわざわざ呼び出したり、そうとわかって城に置いたりする理由が思いつかない。

そう考えれば、体力が上がってないのも納得できる気がする。ましてや私に特殊能力なんて目覚めるわけがないのだ。たとえ他に私を呼び出した理由があつたとしても、怒りと殺意しか沸かない。

だいたい初代勇者はどこに行った？！

脱走だなんて余計なことをしやがって、おかげでこっちまでややこしい事に巻き込まれる破目になつたし。

彼も不本意だったろうけども、むかつくものはムカつくのだ。

それに、私の前に呼び出された女の人……彼女は下手したらすでに

死んでるかもしれない。

いままで死なんて他人ごとに考えていたけど、今更沸いてきた実感に身体が内臓から冷えていくようだった。

勝手に呼ばれてその所為で死ぬだなんて……笑えない冗談だ。

今はこの場にいない勇者に、やつあたった所で頭にまた疑問がよぎる。

そもそも、『勇者』初代はなぜ呼び出されたのだろうか？

そういえば初代と呼ばれていた勇者もかつてこの城に居たのなら、どの部屋に住んでいたんだ？

そしてどうやって城から脱出した……？

あ。と思い立った可能性に、弾かれたようにベットから飛び起きこの部屋を見回す。

この部屋にどこか見覚えがあった。何個か家具は変わっているが、間違いない。

部屋の隅に、ひっそりとたたずむ古びた鏡。

私を映し出すそれに、指をそっと触れてみる。

ひんやりとした感触は、私の指を拒むようにただそこにある。

それでも、私には一筋の希望のようだった。

……手掛かりがあるかもしれない。ここから脱出するための。

第5話 ヒーローについての考察（後書き）

読んでくださった方、お気に入り登録してくれた方ありがとうございます。更新の励みです！

今回は少し短めです。

早く城から脱出するところまで書き上げたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4259v/>

ジルコンの勇者

2011年10月9日13時03分発行